Japanese Association for Religious Studies

伊勢信仰と民間における風鎮め

小出亜耶子

近代以降科学の発展によって原理が解明されるまで、天候の変化は、神など何らかの超自然的な存在が操作するものだと考えられ、その存在とコミュニケーションをとり、気象災害の発生を抑えるための儀礼がおこなわれている。暴風が吹かないように祈願する風鎮め儀礼もそうした儀礼の一つである。伊勢信仰には風神信仰としての側面があり、その側面が風鎮めとどのように関連しているのかについて考察していきたい。

日本書紀に既に「神風伊勢国」という言葉があるように、非常に早い時期から伊勢は風との関連性を持つと考えられてきた。万葉集にもすでに「神風の」が「伊勢」を導く枕詞として登場している。こうした伊勢の神風は、本来は海に吹く風のことであり、海神の管轄であったらしい。

しかし、いつしか伊勢の風信仰は、伊勢信仰の農業神・食物神としての性格に影響され、風雨の害が無く五穀豊穣であることを祈るものへと変化していった。現在伊勢の内宮・外宮にある風日祈宮と風宮に関連して行われる行事のほとんどもこうした農業に関連する神事である。さらに、蒙古襲来の際の台風（一般に「神風」と呼ばれる）が風日祈宮と風宮が吹かせたものであるという認識が広まったことにより、伊勢の神風は攘夷祈願の対象ともなるようになった。

国家単位で行われる攘夷祈願は当然のこととして、五穀豊穣のための風鎮めについても、公的には広く行われているものの、民間レベルの風鎮め行事とはあまりつながりが見つからない（そうした風鎮め儀礼には、諏訪信仰や地方のローカルな風神信仰との結びつきの方が強く見られる）。

しかし一方において、物理的というよりはむしろ霊的な、中でも邪悪な力を持つ風に対抗するための対抗措置として「伊勢の神風」に対する祈願が行われるパターンが見られる。

江戸時代に現れた「髪切り魔」と呼ばれる怪異に対しての「異国より悪魔の風の吹きくるに外吹き戻せ伊勢の神風」という呪歌、あるいは四国の「夜雀」という妖怪を追い払う、「チッチッチと鳴く鳥を、はよ吹き給え、伊勢の神風」という呪歌には、伊勢の神風の神威をもって害を与えるものを吹き払おうという発想がうかがえる。

こうした発想が出てきた背景には、伊勢信仰が発展の過程で、病に対して霊験のある神であると認識されるようになり、その霊威が個人的な幸福を祈るレベルにまで達してきたという変化があると考えられる。疫病流行の際に、「神風やよものことの葉ふきはらひちらぬは人の命なりけり」などの、神風が疫病を逆に吹き払ってくれるものであるという発想が見られる歌が流行するようになったことからもそれがうかがえる。

すなわちこうした呪歌は、「実際の風」、物理的な空気の移動である風ではなく、風に乗ってやってくると考えられたもろもろの災いを神風の霊威によって吹き払おうという観念が現れたものであり、髪切り魔や夜雀に対する呪歌は、こうした発想がさらに卑近なレベルにまで膾炙したことから生まれてきたものであろう、と考えられるのである。

こうした呪歌の誕生の根底には、伊勢信仰が広く民衆に広ま

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

り、「伊勢の神風」というキーワードが広く知られていったことがあるのではないかと考えられる。「神風の伊勢」「伊勢の神風」という、枕詞であったキーワードが民俗レベルにおいて破魔の効果を持つ呪文として機能するようになっていった経緯について、伊勢信仰の広まりとパラレルに整理していくほか、民俗儀礼における呪歌の役割と合わせてさらなる考察を行う必要がある。

神道祭祀における祝詞奏上と玉串奉奠について

竹内　雅之

神社本庁傘下の神社においては、祭祀規程により祭祀の式次第が定められている。それによると、例えば月次祭のような小祭の場合、主要な部分は「修祓」「宮司一拝」「神饌を供す」「祝詞を奏す」「玉串を奉りて拝礼」「神饌を撤す」「宮司一拝」のようになっている。この式次第の原型は明治八年の「神社祭式」にある。例えば、官国幣社祈年祭において、祝詞、玉串に関する部分を抜き出すと「神官ノ長官祝詞ヲ奏ス」「地方ノ長官玉串ヲ献リ拝礼」「同官員拝礼」「神官ノ長官玉串ヲ献リ拝礼」「同次官以下拝礼」のようになる。この部分は明治時代にできた新しい祭式で、地方長官が最初に拝礼することにより国家管理の神社たることを体現している。星野光樹は、平田派国学者が玉串に「捧げ物」という新しい役割を見出したことにより、近代の玉串拝礼行事ができあがっていった、と指摘する（「玉串ヲ奉リテ拝礼」についての一考察」『神道研究集録』十七）。それでは、近世以前、玉串に関する行事は、どのように行われていたのであろう。

近世以前、玉串関連行事が確認できるのは、宮中を除いては、神宮のみである。「延喜祝詞式」六月月次祭祝詞は「度会の宇治の五十鈴の川上に大宮柱太敷き立て（中略）常も進る御調の糸、由貴の御酒・御贄を、横山の如く置き足らはして、大中臣太玉串に隠り侍りて、今年の六月の十七日の、朝日の豊栄登に称へ申す事を、神主部・物忌等諸聞食せと宣る」である。このなかに「太玉串」の語がみえる。それでは、改めて玉串とは何であろうか。河野省三は『神道要語集』「たまぐし」の項目で諸説を紹介している。なかでも、鈴木重胤の「八重榊は神等の御霊を寄給はむ料、太玉串は神の御前に捧げる幣なりけり」という説に多くのページをさいている。発表者は学者よりも、現場の奉仕者の意見に注目したい。外宮祠官御巫清直は「八重畳八重榊位置考證」（『神宮神事考證』所収）のなかで太玉串と八重榊の違いを指摘している。それによると、一本一本のバラになった榊が太玉串で、合計一二八本が玉串御門の前に規則正しく配置されているのが八重榊ということになる。内宮祠官薗田守良は『神宮典略九』「祭祀用具」の最初に玉串の項目を設けて、その意義を「此榊を取持はいかなる故ぞといふに、内宮儀式帳に、禰宜乃捧持太玉串仁、大中臣隠侍弖、天津告刀乃太告刀、厚広事遠多々倍申、玉串発由如件、と有如く、大神の御光のいとまばゆき故に、此榊を挿隠れて告刀申すよし也」と説明している。皇太神宮では日の大神から放たれる御光がまぶしいため八重榊と太玉串に隠れて祝詞を奏上するというのである。それでは、御饌都神を祭神とする外宮の玉串は、ど

NII-Electronic Library Service